

# 甲状腺機能亢進症

甲状腺機能亢進症(甲状腺中毒症)とは、甲状腺ホルモンであるトリヨードサイロニン (T3) または、サイロキシニン (T4) の一方または両者の分泌過剰によって起こる全身性の病気で、猫（とくに8歳以上）に多くみられます。一見して元気があるように見えるので飼い主さんが気付くより、動物病院で発見されることが多い病気です。

## 甲状腺の働きと構造

甲状腺は、喉近くの気管に付着した左右1対の腺組織で、甲状腺ホルモンを産生・分泌しています。甲状腺ホルモンの産生・分泌には、脳の視床下部から放出される甲状腺刺激ホルモン放出ホルモンや、下垂体から放出される甲状腺刺激ホルモンが関与しています。

甲状腺ホルモンは、トリヨードサイロニン (T3) とサイロキシニン (T4) と呼ばれています。

甲状腺ホルモンは各種身体の代謝に影響を及ぼし、熱産生の調節、糖質、たんぱく質、脂質代謝を含む多くの身体の新陳代謝を調節し、成長、成熟、正常な生理機能の維持に役立っています。

## 原因

最も多い原因は、甲状腺の片側もしくは両側の機能性甲状腺腫です。

甲状腺腫を起こす直接的な要因は、現時点では不明ですが、キャットフードの食事内容、飼育環境の変化、肥料や除草剤への暴露が原因ではないかと考えられています。

甲状腺癌が原因となって、甲状腺機能亢進症を起こすことは猫ではまれです。

## 症状

甲状腺機能亢進症の症状はさまざまで、以下のようなものが挙げられます。そのほかの猫の病気と症状が共通していることが多いので注意が必要です。

- たくさん食べるわりにはやせていく
- 落ち着きがなく攻撃的な行動を取る
- 被毛の変化(被毛がヨレヨレになる、過度の脱毛、つやがない、毛づくろいをしない)
- 多飲多尿
- 嘔吐
- 下痢
- 老齢であるのに発情しているようだ
- 眼がらんらんとしている

## 診断

甲状腺機能亢進症の検査にはさまざまな検査法があります。この病気にはいろいろな合併症が伴っていることがあるので、ほかの病気との鑑別が必要となります。

1. 身体検査：大きな甲状腺、削痩、心雑音、頻脈、検査時の過剰興奮、脱水、  
脱毛・みだれた被毛、萎縮腎、攻撃性、爪の成長過大、頸部の腹側への屈曲
2. スクリーニング検査  
甲状腺機能亢進症の疑いがある場合、もしくは合併症が疑われる場合には必ず行ったほうがよい検査です。  
一般血液検査：赤血球増多症、大赤血球症、白血球増多症、好中球増多症、好酸球減少症  
血液生化学検査：ALT・AST・ALP・LDHの上昇、高窒素血症、高リン血症、高血糖  
※甲状腺機能亢進症の猫では腎機能不全を併発していることがあり、その場合 BUN・CREA の上昇が認められる可能性があります。
3. 画像診断  
甲状腺機能亢進症の猫は肥大型心筋症を併発していることが多く、胸部レントゲンや超音波検査を行い、心臓を確認します。  
また、腎機能不全も併発することがあるので、腎臓の大きさや形態の確認も必要です。
4. 確定診断のための検査  
☆甲状腺ホルモンの測定  
血液中のT4（サイロニン）、fT4（遊離型サイロニン）の値を調べます。  
甲状腺機能亢進症の猫の約60%にT4の上昇が、95%にfT4の上昇が認められます。

## 治療

甲状腺機能亢進症の治療は、過剰に分泌されている甲状腺ホルモンの分泌を調節することです。  
内科的治療法には抗甲状腺薬（メルカゾールなど）を用います。投薬により、食欲不振、嘔吐などの消化器症状、肝障害、血小板減少などが起きる場合があるため、定期的に身体検査、血液検査を行う必要があります。  
また、外科的治療として、手術で両側もしくは片側の甲状腺を除去する場合があります。

